

# 夏目漱石「趣味の遺伝」論

— 〈遺伝〉と文学 —

河田和子

夏目漱石の小説に「趣味の遺伝」という変わったタイトルの短編がある。日露戦争終結後、凱旋部隊の様子が新聞や号外で報道されていた時期に書かれたもので、明治三十九年一月「帝国文学」に発表し、『濠虚集』（大蔵書店、明治三九・五）に収録された。従来、この小説は漱石の戦争表象や日露戦争に対する意識が問題にされてきたが<sup>1</sup>、ここでは小説のタイトルと関係する〈趣味の遺伝〉説に焦点を当てて考えたい。語り手の「余」は「学者」であって「文士」ではないが、自ら見聞きしたことを「小説めいた事」として書いており、この小説はメタ小説の構造になっている<sup>2</sup>。「余」の展開する〈趣味の遺伝〉説については、「唐突」で「荒唐無稽」の感がぬぐえぬものとして論じられてきたが<sup>3</sup>、何故作者が「漱石が「趣味の遺伝」というタイトルを付けたのか」ということは殆ど触れら

れない。「余」の遺伝説がそのままタイトルになったと考えられたからだろうが、「余」が小説めいたものを書く意図と漱石が虚構の小説として「趣味の遺伝」を書いたその目論見とは区別して考える必要があるのではないか。〈趣味の遺伝〉説を展開する「余」の物語を漱石が何故書いたのか、その目論見をタイトルの問題と合わせて考察したい。

まず、「余」が〈趣味の遺伝〉説を展開した所の問題と経緯を整理しておく。「余」は、新橋で將軍らの凱旋を眼にし、旅順で戦死した亡友・浩さん（河上浩一）の事を追想して寂光院へ行った時、墓参りをしていた「花の様な佳人」と遭遇し、その女と浩さんとの関係を探ろうとする。「余」は、浩さんの陣中日記を読み、出兵前に郵便局で偶然出会い夢にまでみる女性が居たことを知り、それが果たして寂光院

の女なのか、それとも別人なのか分からず、「遺伝で解ける問題」だと考える。そこで「余」が考え出したのが〈趣味の遺伝〉Ⅱ「父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔て、脳中に再現する」というもので、「浩さんの先祖と、あの女（筆者注、寂光院の女）の先祖の間に何事かあつて、其の因果で」相思の情も生じたのではないかという仮説を立てる。「余」は、その仮説を証明する為、浩さんの祖父と寂光院の女（工学博士小野田の妹）の祖母の間にあつた因縁（相思相愛の仲であつたが悲恋で終わる）をつきとめ、先祖の恋愛感情がその子孫に遺伝するといふ自説が実証出来たと考える。

もつとも、日記の女と寂光院の女（Ⅱ小野田の妹）が本当に同一人物かは疑問が残る所で、小説の最後では、浩さんの母親の希望で小野田の妹と引き合わせることになるが、その話は「端折つて簡略」に述べられる。浩さんの母親の話では、仲良くなった小野田の妹に日記を見せた所「それだから私は御寺参をして居りました」と答えたというが、「それ」の指す内容も曖昧で、「余」が当人にたずねて確認したわ

けでない。その点で「余」の書いた文章には空白部分がある。もし、日記の女と小野田の妹が別人なら「余」の仮説も崩れる為、それを恐れて小野田の妹に日記の当人がどうかをたずねなかつたのかもしれない。<sup>4</sup>

「余」が「小説めいた」ものを書いたのも、戦死した浩さんを弔い追悼する気持ちがあつたからだろうが、小説の終わりの方では、「学問上（筆者注 遺伝の説）から考へて相当の説明がつくと云ふ道行きが読者の心に合点出来れば此一篇の主意は済」むといふように、〈趣味の遺伝〉説を実証する為に書いてきたかのように述べる。が、「余」自身、生物学者や医者ではない。『マクベス』等の西洋文学を例に「諷語」の説明をしたりすることから西洋文学の学者だろうが、その「余」が遺伝の問題にこだわるのはどうしてなのか。

注意したいのは、「余」の〈趣味の遺伝〉説の特徴として、かなり文学的性格の強いものということである。<sup>6</sup>それは次のように、自説を実証するものとして文学作品の登場人物の恋愛を取り上げているこ

とからも言える。

余が平生主張する趣味の遺伝と云ふ理論を証拠立てるに完全な例が出て来た。ロメオがジュリエットを一目見る、さうして此女に相違ないと先祖の経験を数十年の後に認識する。エレーンがランスロットに始めて逢ふ、この男だぞと思ひ詰める、やはり父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔て、脳中に再現する。

「余」は、シエークスピアの『ロミオとジュリエット』やアーサー王伝説の登場人物に見られる一目惚れの心理を（趣味の遺伝）説で説明しようとする。「余」は「二十世紀の人間」という自負から、一目惚れの文学的題材も科学的に遺伝の問題と結び付けて解釈する。

元々、「余」が男女の恋愛を遺伝の問題として考えたのも、前から遺伝に興味を持っていたからで、専門知識がないだけに好奇心をそそるものだったのだが、遺伝の起原発達史や「最近の学説」を調べるようになったのは「ふとした事」が契機となっている。

遺伝と云ふ問題に関して専門上の知識は無論有し

て居らぬ。有して居らぬ所が余の好奇心を挑発する譯で、近頃ふとした事から此問題に関して其起原発達史の歴史やら最近の学説やらを一通り承知したいと云ふ希望を起して、それから此研究を始めたのである。（略）段々調べて見ると複雑な問題で、是丈研究して居ても充分生涯の仕事はある。メンデルズムだの、ワイスマンの理論だの、ヘッケルの議論だの、其弟子のヘルトウイツヒの研究だの、スペンサーの進化心理説だのと色々の人が色々の事を云ふて居る。

「ふとした事」の内容は触れられないが、「余」は、メンデルズムやワイスマン等の遺伝理論を読んでいる。だが、（趣味の遺伝）説自体、どの理論に基づくものでもない。一柳廣孝「理科」と漱石「趣味の遺伝」から「国文学」平成九・五の指摘通り、進化論に基づく「アカデミックな遺伝学の延長上に自らの理論を組み立てている」のではなく、「むしろそこから逸脱を強調するかのよう」な理論である。それも文学的題材に基づく形で考えられたものだから当然だが、気になるのは、明治三〇年代当時、遺

伝と文学とを結びつけるのなら、当然想起されてもいいエミール・ゾラの名が作中に全く出てこないことだ。「余」が文学関係の学者で遺伝に興味を持つのなら、ゾラの名も出しそうなものである。だが、逆に意識しているから「近頃ふとした事から」とぼかしたのかもしれない。

そのように推察したのも、ゾラの小説『パスカル博士』（一八九三年）に、前の引用を想起させる、次のようなくだりがあるからである。

パスカル博士をとりわけ遺伝法則にのめりこませるきっかけとなったのは妊娠についての研究だった。（略）自分の一族を分析対象にすえ、実験の主要な場になると、さわめて正確で完全な事例が明らかにになった。（略）彼はすべてを証明できる総合的な遺伝理論の樹立を試みるようになった。（略）ダーウインのジエミュールやパンゲネシスから、ヘッケルのベリゲネシスへとたどり、ゴードンのスタープも検討した。仮はヴァイスマンが提出しようとしている理論がいずれ優勢になるのを予感して（略）、この（筆者注、生殖質の

伝達は世代を経ても常に不変であるという意見を  
取り入れた。

（『ルーゴン・マッカール叢書』第二〇巻、論創社、  
平成一七・九）

医師・パスカル博士は、先人の遺伝理論を取り込みながら、「すべてを説明できる総合的な遺伝理論」の樹立を目指し、やがて「ルーゴン・マッカール家系樹」をまとめる。パスカル博士自身、「考えても尽きることはない主題」として「遺伝こそが世界を作つて」といると考えていた。この著作を漱石が読んでいたかは不明だが、英訳もされていることから、読んだ可能性もある。もしそうなら、「余」が遺伝について調べている所など『パスカル博士』のパロディとして書かれたかのように見えてくる。

漱石が『パスカル博士』を読んでなかったとしても、その蔵書に英訳本の『居酒屋』（原著一八七六年、英訳一九〇七年）や『ナナ』（原著一八七九年、英訳の出版年は不明）、及び『ローマ』（原著一八九六年）があり、その著作には目を通していた。「余」がゾラを意識していたかどうか定かではないが、少なくとも

も漱石は、ゾラを意識してこの小説を書いたのではないか。

\*\*\*

ゾラの小説は、漱石門下の物理学者・寺田寅彦も読んでいたらしい。漱石の明治三八年八月六日野村伝四宛書簡には、寺田が「葉書のつゞきもの、小説」として「夫婦の中に子なきを憂ひて大磯へ貝を食ひに行くといふ趣向」のものを書いてきたと記されている。それは「ゾラ君の翻案」だったとされるが、岩波書店『寺田寅彦全集』全三〇巻（平成八年（一一年））を見てもそれに該当する小説や書簡はなく、原典のゾラの小説も未詳だが、漱石はそのゾラの小説に目を通したのだろう。「文芸の哲学的基礎」（明治四〇年四月二〇日東京美術学校での講演、「東京朝日新聞」同年五月四日〜六月四日掲載）で、ゾラの同小説を例に挙げ、次のように述べている。

探偵が探偵として職務にかゝつたら、只事実をあげると云ふより外に彼等の眼中には何も無い。（略）まず彼らの職業の自分を云ふと、尤も下劣な意味に於て真を探ると申しても差支ないでせ

う。（略）現代の文学者を以て探偵に比するのは甚だ失礼であります、唯真の一字を標榜して、其他の理想はどうなつても構はないと云ふ意味な作物を公然発表して得意になるならば、其作家は個人としては、いざ知らず、作家として陥欠のある人間でなければなりません。病的と云はなければなりません。（略）ゾラとモーパサンの例に至つては殆んど探偵と同様に下品な気持がします。

引用の前では、フランスの自然主義作家モーパッサンとゾラの小説の粗筋を紹介し、「真の一字を偏重視」する「現代文学者」の問題を指摘する。講演で漱石は、「文芸家の理想」として四種の理想Ⅱ「美的理想」「真に対する理想」「愛に対する理想及び道義に対する理想」「莊嚴に対する理想」があり、それらは「相冒すべきものでない」といふ「真の一字を標榜して、その他の理想はどうなつても構はない」という傾向の文学を「病的」と難じている。

この漱石の批判は、日本の自然主義文学における事実偏重の傾向を難するものでもあろうが、注意したいのは、「真の一字を偏重」する作家と「下劣な意

味に於て真を探る」「探偵」を同類と見なしていることである。「趣味の遺伝」では、「探偵」の語が四カ所見られ、「余」は探偵を「下等な」者として軽蔑する一方、寂光院で遭遇した女の行く先を見届けようとし、女の素性と浩さんとの関係を探ろうとして「丸で探偵」のような事をしている。「探偵的態度」でもって事物にあたる自分に呆れつつも、「余」は浩さんと小野田の娘の先祖が恋仲だったことを「家令」の老人から聞き出す。河上家の墓に見知らぬ美しい女が来ていたことを「寂光院事件」と称し、謎解きしていくこと自体、「余」の「探偵的態度」を示すものである。そうした「探偵的態度」によって「余」は、自ら考え出した遺伝理論に基づく仮説を実証しようとするのであり、浩さんと寂光院の女の祖先、「両人の血統」を調べる。このように探偵を軽蔑しつつも、探偵的態度で自らの遺伝論を展開していく語り手<sup>11</sup>書き手を設定した漱石の念頭にあったのは、「探偵と同様に下品な気持」がすると難じたゾラその人であったと考えられるのである。

当時、小説のタイトルに〈遺伝〉の語が付されて

いれば、読者はゾラの小説を想起しやすかっただろう。ゾラの名が日本の文学者やジャーナリズムの知れる所となったのは明治二〇年代からだだが、特に三〇年代には、永井荷風（『地獄の花』金港堂、明治三五・九）や小杉天外『はやり唄』（春陽堂、明治三五・二）等によって環境と遺伝を重視するゾライズムが紹介され、翻訳もなされる。一九〇二年<sup>12</sup>明治三五年にゾラは逝去し、その後の数年間、新聞や雑誌でゾラ関連の記事が度々掲載されている。「帝国文学」明治三六年一月号には「海外騷壇 エミール・ゾラ」が掲載され、その生涯や著作が紹介されている。同記事では、生理学者クロード・ベルナルの著書（『実験医学序説』一八六五年）により「科学的精神を啓発せられたりしゾラは世間の問題たらんとする遺伝説を骨子として新企画に着手」し、彼のまとめたルーゴン・マツカール叢書二〇巻は、「千八百五十年乃至七十年頃迄仏蘭西に行はれし遺伝説の立場より観察したるゾラの社会観人生観を包容する」ものと記されている。また「毎日新聞」掲載の「仏国文豪ゾラ（一）」（九）（明治三五年一月一日）

一一日)では、その生涯と功績を紹介しつつ、次のような批判をしていた。

家族より受けたる素質を遺伝的に継承して、之に境遇の変化が絆縁して、幾多の悲劇を生ずるに至るてふ一貫の思想を書かんと欲す、(略)余ハ此に遺伝と境遇の二者を精細に研究して、一人の他人を生ずる關係を教育的に叙せんと欲するなりと、(略)然し其の理論を遺憾なく実現せしめて居る丈、矢張り如何しても器械的なるを免れない、何となれば一遺伝の法則の如き、未だ学術上の一仮定説たるに過ぎないものを、直に取つて以て既に確定せる真理なるかの如く吹聴するさへ頗ぶる奇怪で(略)矢張り不自然たるを免れないのである。(「仏国文豪ゾラ(八)」明治三五・一〇・一〇)

この記事の執筆者は不明だが、ゾラのみならず、「未だ学術上の一仮定説に過ぎない」遺伝学を「既に確定せる真理なるかの如く吹聴する」「奇怪」さは、「余」の態度にも見て取れ、この批判自体、(趣味の遺伝)説を説く「余」にそのまま当てはまる。動物学者・

丘浅次郎の『最新遺伝論』(六盟館、大正八・七)でも指摘されているように「遺伝と遺伝でないものとの間に判然たる境界を定めることは頗る困難」で、「今日遺伝に關して學者間に盛んに闘はされて居る議論の如きも(略)遺伝と云ふ文字の使い方が人々により違ふのに基づいて居る」状況があつたし、遺伝論も学術上の一仮説にすぎぬことを漱石は意識していた。だから、「余」の(趣味の遺伝)説も、曖昧さの残る(小野田の妹が日記の女なのか実際の所はつきりしない)書き方になっており、ゾラを皮肉るような設定になっている。

そのように見てくるなら、(遺伝)と結びつけられた(趣味)についても注意が必要である。漱石自身、明治三九年二月二三日森田米松宛書簡で、「趣味の遺伝」の「趣味は男女相愛するといふ趣味の意味」と述べているが、これは「余」の遺伝説の「趣味」の説明である。「余」が小説めいたものを書く二重構造の小説であることから考えて、タイトルの「趣味」には二重の意味が込められている。漱石は、『文学評論』(春陽堂、明治四二・三)で、「文学は吾人の趣味

の表現」、即ち「好悪を表はすもの」で「趣味」自体「未  
来の行為言動を幾分でも支配する傾向を帯びたもの」  
と述べている。作中「余」が、「好奇猷とも称すべき  
代物」となって寂光院の女の手掛かりを探り、専門  
知識の異なる遺伝の問題は「好奇心を挑発する」も  
のと述べたりするのも、その言動は好悪の感情、好  
奇心に基づく。要するに、〈趣味の遺伝〉説も、「余」  
の趣味⇨好悪の感情、特に好奇心を反映した形で思  
案されたものにほかならない。

このように、この小説で遺伝のモチーフを扱った  
こと自体、漱石は暗にゾラを意識して書いた所があ  
るのだが、それは漱石の文学理論、方法と関係して  
いる。前述したように、漱石は「真に対する理想」  
を持つものとして自然主義文学、ゾラの小説を意識  
していたし、『文学論』（大倉書店、明治四〇・五）では、  
「現今の一派」は「文学においても人生の真を發揮す  
ることを以て小説の理想となす」が、「然れども人生  
の真とは趣味より見たる標準（筆者注 基準）の一  
に過ぎず」、「現在の潮流が好悪の推移を受けて吾人  
をして、しばらく此理想に停在せしむ」ものと書き

ている。「現今の一派」⇨自然主義の文学者達が重視  
する「人生の真」も、趣味⇨好悪の感情に基づいて  
捉えられたものにほかならぬことを漱石は認識して  
いた。それ故、遺伝の問題も、文学専門の学者「余」  
の〈趣味〉と結びつけた形で、遺伝学を援用した（⇨  
科学的真理を求めた）ゾラの小説を相対化するよう  
な小説を書いたのだと考えられる。タイトル「趣味  
の遺伝」も、そうした漱石の目論見、問題意識を表  
出したものだったのである。同時代の文学動向を意  
識しつつ、自らの文学論を展開しようとした点で、「趣  
味の遺伝」は、漱石にとっての〈実験小説〉だった  
と言えよう。

（付記）「趣味の遺伝」ほか漱石の著作は、岩波書店  
版『漱石全集』（夏目金之助著）全三〇冊（一九九三  
～二〇〇四年）を参照、引用も同全集による。

1 大岡昇平「漱石と国家意識——趣味の遺伝」を  
めぐって——（『世界』昭和四八・二）をはじめ、  
佐藤泉「趣味の遺伝」——旅順上空、三次元の眼

- について」(『国文学』平成六・一)、堀井一摩(『銃後』の戦争表象―夏目漱石「趣味の遺伝」―)(『社会文学』平成二・三・六)等を参照。
- 2 戸松泉「小説家小説」としての「趣味の遺伝」―自己韜晦する語り手「余」の物語言説―(『文学』平成二〇・九)も、「メタ小説」として考察している。
- 3 神田祥子「趣味は遺伝するか―夏目漱石「趣味の遺伝」論」(『日本近代文学』平成一九・五)を参照。
- 4 元々小野田の妹は、先祖の因縁を知って墓参りに来ていたのかもしれない、日記を見た時も、浩さんの母を気遣って(別人だったとしても)話を合わせた可能性がある。
- 5 前出の戸松論も「余」の「専門領域はどう考えても西欧文学」と指摘している。
- 6 斉藤恵子「『趣味の遺伝』の世界」(『比較文学研究』昭和四八・九)では、ウオッツ・ダントン『エイルウイン』(一八九八年)の恋愛感情の遺伝というテーマの影響を指摘する。
- 7 “Doctor Pascal” translated by Mary J. Serrano (International Association of Newspapers and Authors) 1901
- 8 『漱石全集』第二七卷の「漱石山房蔵書目録」を参照。